

2026年1月25日 説教「神の国で食卓に」

ルカの福音書 13章 18～30節

ルカの福音書 13章の前段は、安息日に主イエスが病の靈につかれた女の癒しの記事でした。18年間も苦しんでいた彼女を、イエスは安息日でしたが敢えて癒されました。

1. 神の国のたとえ (18～21節)

①神の国は何に似ているか (18) 「そこで、イエスはこう言われた。『神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたら良いでしょう。』」

「神の国」は福音書における主題の一つです。今ここで、イエス・キリストは神の国について教えるために、神の国は①何に似ているか②何に比べられるか、と問題提起されています。弟子をはじめ、そこにいる人々にまずは考えさせようとしてくださっているのです。

②からし種のようなもの (19) 「『それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、成長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。』」

その上で、語られます。神の国はからし種のようなものだ、というのです。からし種は極小でどこにあるかがわからないような種です。ところが、それが土の上に蒔かれると驚きの出来事が生じます。それは芽を出すと成長を始めて、数メートルほどの木となります。そして、やがて空の鳥が枝に巣を作るほどになるというのです。

③パン種のようなもの (20～21) 「またこういわれた。『神の国を何に比べましょう。パン種のようなものです。女がパンを取って三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。』」

また、イエスは神の国をパン種にたとえられました。パン種が粉のなかに混ぜられると膨らむ。ここにはパン作りをする女性が登場します。彼女は家の一日分のパンを作る量である三サトンの粉にパン種を入れます。すると、こねられた粉は焼くのにちょうど良い程に膨らんだというのです。

2. 神の国に入るために (22～26節)

①救われる者は少ないのか (22～23) 「イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。すると、『主よ。救われる者は少ないのですか。』という人があった。イエスは、人々に言われた。」

ガリラヤからエルサレムに向かう記述が多いルカの福音書。あちらこちらの町や村を宣教されているお姿をご想像ください。その旅の途上において、ある人が尋ねたのです。「主よ。救われる人は少ないのですか」と。質問者は自分も救われたいし、多くの人々も救われてもらいたいと願っていたのでしよう。

②狭い門から入りなさい (24～25) 「『努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろうとしても、入れなくなる人が多いのですから。家の主人が、立ちあがって、戸をしめてしまつて

からでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください。』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、《あなたがたがどこの者か、私は知らない》と答えるでしょう。』

イエスは誰でも救いへの道を示されます。「努力して、狭い門から入りなさい」と教えられます。福音の門は入りにくそうですが、祝福があるのです。しかし、後になって入ろうとして、懇願してももはや間に合わなくなるというのです。ここで、家の主人にたとえられているのは、言うまでもなく主なる神です。主人が後で来た人に知らないと言われるというたとえが、裁き主なる神から、知らないと言われるのだとすれば、それは峻厳なるものです。

③主人から否定される者の弁解(26)「すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』」

それに対し、入れなかった人はいろいろと言うのです。ご主人さま、一緒に飲食させていただきました。また、かつてはご主人の教えを拝聴もしました、などとお情け頂戴をするというのです。しかし、これらの言い訳は神の前で通ずるでしょうか。

3. 異邦人たちが救われていく (27~30 節)

①主人からの最後通告(27)「だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。』」

そうした言い訳を主人は受け入れません。主人は「あなたがどこの者だか知りません。」と言い、さらに厳しく「不正を行う者たち。出て行きなさい。」と厳然たるお言葉です。これはまた、神の御姿勢でもあります。

②外に投げ出される者の泣き叫び(28)「神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちが入っているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。」

ここからはたとえではありません。アブラハムに始まるイスラエルの民や、預言者たちが神の国に入っていたとしても、不信仰な指導者や民もそこに入られるのでしょうか。そうではないと、告げられています。そうなった時、民は泣き、悔しがることになるというのです。

③いま先頭の者がしんがりになる(29~30)「人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。いいですか。今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

一方、イスラエルの民ではなくても、神の前に導かれた神の民が東西南北から集められて、神の国で食卓に着くことになるというご宣言。まさに、神の民を自認するイスラエルの民にとっては驚きのお言葉でありました。しんがりだと思われる異邦人が救いにあずかり、先頭にいると思っていたイスラエルの民が後塵を拝することになるというのです。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所には、まず主イエスによる二つのたとえ話が記されています。一つは神の国はからし種のようにと教えられ、もう一つは神の国はパン種のようにと示されました。からし種もパン種も福音あるいは御言葉と言い換えても良いでしょう。福音は、人の目には入らぬほど小さくても、大きく成長する設計図と力を内包しているのです。また、パン種がなければ膨らまずに、美味しいパンはできないように、福音や御言葉の力がなければ人は救われず、霊的成長をすることもできないのです。

このような鮮やかなたとえ話を聞いて、神の国に入らせていただきたいと願う人はいるでしょう。そのような者たちに、イエスは「努めて、狭い門から入りなさい」と言われるのです。キリストを信ずれば儲かりますとか、イエス・キリストを信じれば成功しますなどと言われれば、もっと多くの人たちがキリスト教徒になるのと言われるかもしれません。ところが、イエス・キリストは「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、わたしについてきなさい」(ルカ 9:23)と言われるのです。これでは、せっかく門の近くにきた人も逃げてしまうのではないかと思う人もいるでしょう。

しかし、矢内原忠雄は、「この狭き門は恩恵の門だ」という言い方をしています。入口は狭くて入りにくいかもしれないのですが、その向こうには本当の意味での恵み豊かな場所があるのです。それはこの世の豊かさとは全く異なる所なのです。人は外見で人や物を見て判断します。それはある面ではあたっています。外見にはしばしばその内側が現れるからです。しかし、この門については、外見で判断すれば判断を誤ってしまいます。イエス・キリストというお方の教えやその御力に惹かれて、多くの人々が集まりました。実際そのいやしや奇跡などは大きな吸引力がありました。しかし、イエスはそれらをこれ見よがしにおこなったではありません。愛に基づいていたのです。外見だけを見る人々はイエスが逮捕され、受難の道へと進むと途端に去っていきました。あの筆頭弟子のペテロですら、イエスを知らないで三回も言ってしまったのです。でも十字架への道は、究極のご愛のゆえでした。ということは、人間はどこまでも外側のことに左右されやすいということなのです。狭き門が恩恵の門だとわかりそこから入る人は幸いです。

私たちの教会もイエス・キリストによりすがり、福音の力に頼って進んでいくならば祝福されると信じて進んでいきましょう。その過程には世の中の方や知恵が介在することもあります。だからといって、そこに根拠をもとめていけば、迷路にはまってしまいうでしょう。一人一人の歩みにおいても同じことが言えます。外側のことに振り回されず、イエス様を仰いでいきましょう。とはいえ、本物の道を求めていく途中で、否定的な言葉や、がっかりさせられる出来事に遭遇することもあるでしょう。しかし、「この希望は失望に終わることはありません。」。努めて恩恵の門の道を進んでいきましょう。そして、ともに神の国の食卓にあずかせていただこうではありませんか。